

子どもの保育における インクルージョン推進に向けた 調査研究の実施

2024年度・2025年度

助成：公益財団法人 日本財団

第8回FLECフォーラム＋ クロージングシンポジウム

2026年2月1日（日）

調査研究事務局次長・社会福祉法人麦の子会

尾西 洋平

Supported by



THE NIPPON
FOUNDATION

障害がある、発達支援が必要であるとわかったとき、 こどもはどこで育つのか？

児童発達支援センター 児童発達支援事業所



児童デイサービス
(2006年)

障害児通園事業
(1998年)

心身障害児通園事業
(1973年)

障害児通園施設
(1957年から順次)

- ・「“訓練の場”というより、生活の場」
- ・「多くのこどもが長時間・継続的に過ごしている」

位置づけ：障害のあるこどもに対して、個別の支給決定に基づき発達支援を提供する通所型サービス。

対象：発達に支援が必要と認められた未就学児（概ね0～6歳、障害種別は問わない）

形態：通所型の支援（毎日・週数回）

児童福祉法6条の2の第2項「障害のある子どもに対し、児童発達支援センター等において、日常生活における基本的な動作の指導、知識技能の付与、集団生活への適応訓練その他の便宜を提供するもの」



児童発達支援のみで過ごすこども
保育所等と行き来することも（併行通園）



保育所・幼稚園・こども園

【問題の所存】

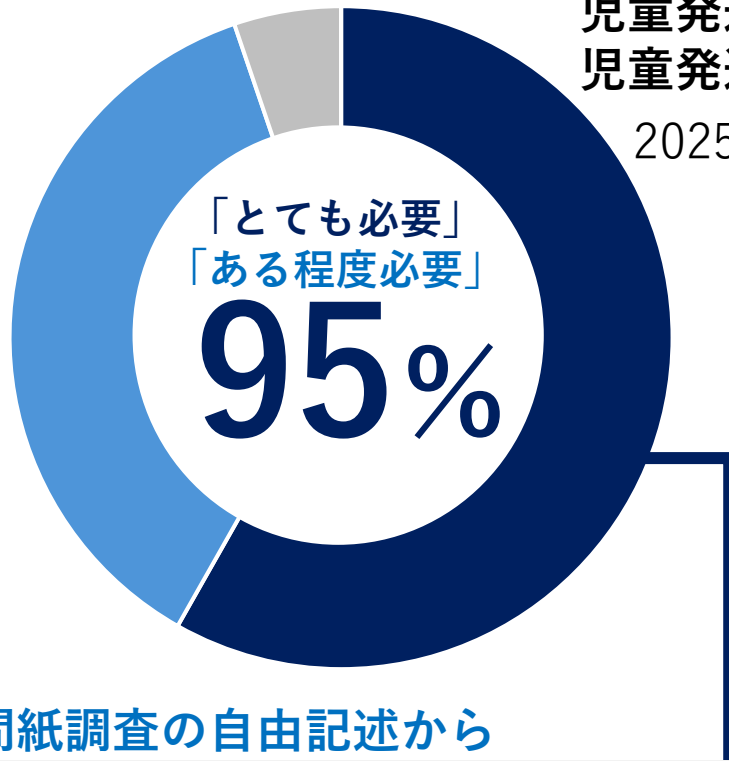
多くの家庭が「保育園に通う未来」を思い描く。しかし、障害や発達特性が分かると「ここでは難しい」と言われる現実がある。このとき、こどもの生活は同年齢集団や地域から切り離されやすい。

- ・ こどもたちが共に過ごすことは、「こどもの権利」
- ・ 課題を解決するためには、乳幼児期の段階において多様性を尊重される「共生の場」（インクルーシブ保育）が重要であり、これを進めていくためには、政策や法制度の改革が不可欠。

【研究の目的】

- ・ 障害の有無にかかわらず、全てのこどもがともに過ごし育ち合う「インクルーシブ保育」を実現するために、実態を明らかにするとともに政策提言を行う（質問紙調査・ヒアリングの実施）

児童発達支援センター
児童発達支援事業所
2025年度：134件



質問紙調査の自由記述から

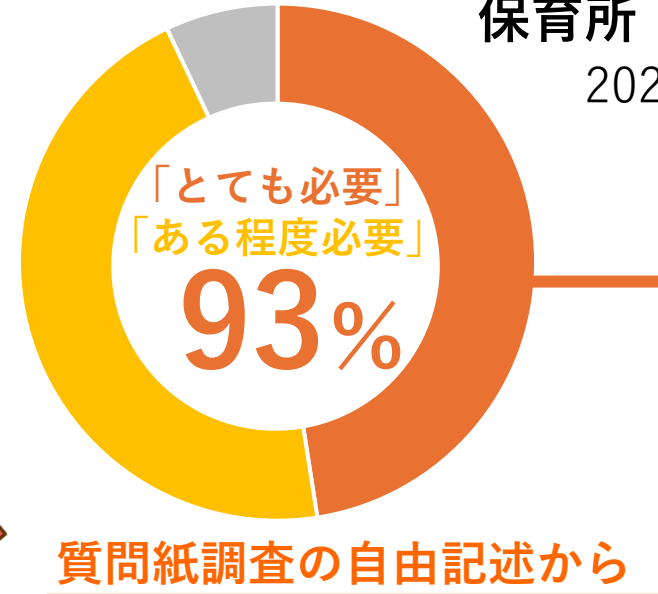
「障がいのあるこどもも、こどもとして当たり前で地域で受け入れられ、お互いの違いを認め合いながら工夫によって一緒にいろんな経験を積むことはこどもの育ちに大切なことだと思う。」

「こどもは理解し合える能力を生まれながらにもっている。分けることでそれが発揮されずに知らないことで壁ができる。」

「こどものうちから共に過ごすことで障害の有無にかかわらず、自然な形で認め合い、後々、地域社会においてもお互いにその人らしく生きていくことに繋がっていくと思う。」

障害のあるこどもと、ないこどもが共に過ごすことは必要だと思いますか。

保育所・こども園
2024年度：565件



質問紙調査の自由記述から

「障害のあるなし、肌の色が違う、様々な特性がある。このような中で小さいころから一緒に生活することで特別ではない当たり前の景色となる。小さい時からの経験が重要。」

「生活をともにすることで、自分と違うひとの存在が当たり前になり、適切な支援を考えて動いたり、自然に思いやりの心が育まれる。何かが出来るか出来ないか、ではない価値観を身につけながら育つ。」

「乳幼児時期から触れ合うことで、自分との違いに気づき言葉の掛け合い、遊び方など子ども自身が自然と近寄るようになる。大人の価値基準ではなくこどもの感性で障がいを理解した姿へ成長する機会になる。」

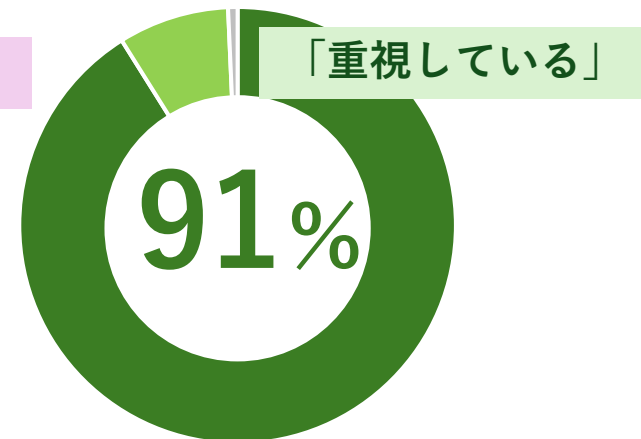
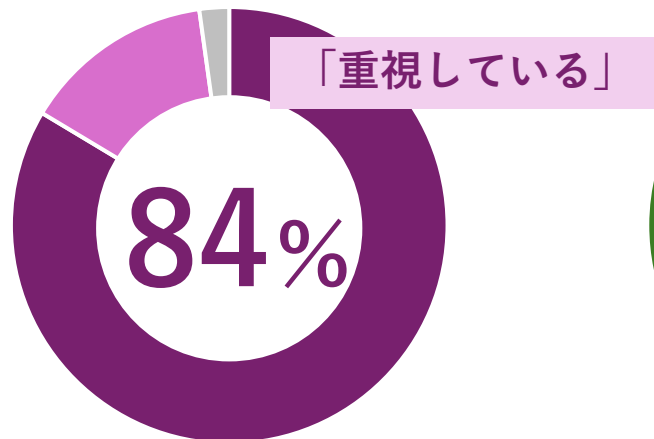


児童発達支援の取り組み

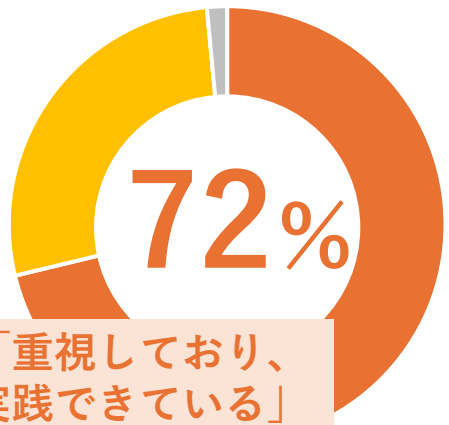
施設における理念と考え方

こどもの生活・遊び・こども
同士の関係を含めた「育ち全
体」をとらえること

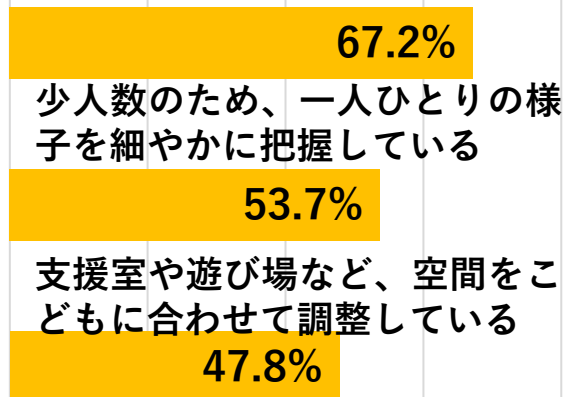
家族と信頼関係の構築や連携
を通じて、共にこどもの育ち
をとらえること



こどもが安心して過ごすための 環境整備・調整



食事・排泄・午睡など、日常生活の場面に柔軟に対応している



質問紙調査の自由記述から

視覚的支援： スケジュールを写真や絵カードで視覚化、課題を視覚的に示すことで、子供が「次に何をすればいいか」を理解し、安心して取り組める環境を整える。

構造化と動線の確保： 動線などの物理的環境を整えることで、子供が自ら準備をするなど自主的な行動を促す。

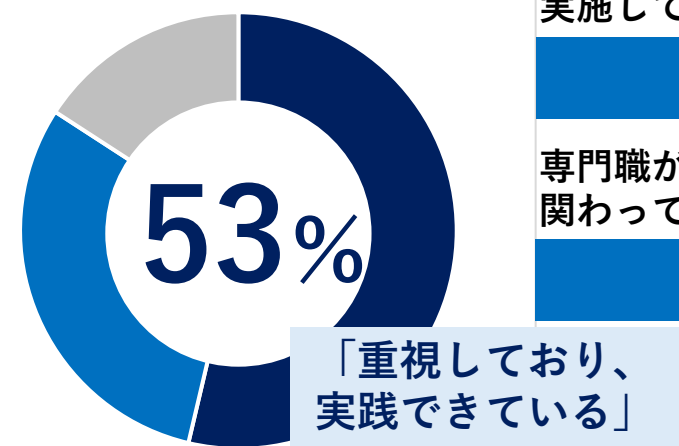
安心基地の構築： こどもにとっての「安心できる場」となるよう、時間をかけてアタッチメント（愛着）を形成。

専門職のアセスメントに基づく個別支援

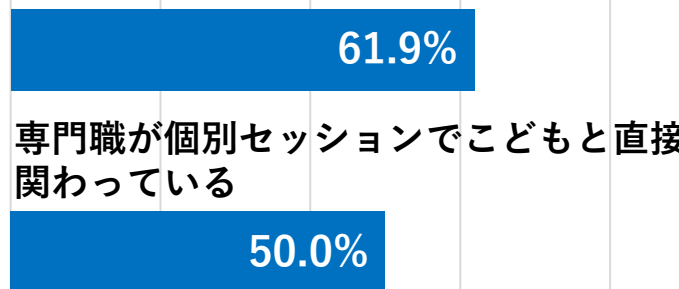
理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、心理士などの専門職が多角的な視点でアセスメント→個別支援の実施。

感覚特性への配慮： こどもの感覚入力の特徴をアセスメント。苦手な刺激を軽減し、好きな刺激を活動に取り入れることで、主体的・意欲的な参加を引き出す。

専門職によるアセスメントと その結果に基づいた支援



専門的な関わりを日常生活の場面の中で実施している



児童発達支援におけるこどもの変化

遊びや活動の幅の広がり 85.1%

遊びや活動の広がり 78.4%

こどもの行動や情緒の安定 77.6%

53.0% 友達との関わりの良い変化

48.5% 自主性・主体的な行動の増加

38.1% 感覚や身体の使用方の理解・調整

【こどもの声の把握・活かし方】ヒアリングから



「発話や指差しが難しいお子さんの場合、視線の先に何があるか、表情、クレーン現象などを注視し、こちらがいくつか選択肢を出して、本人のリアクションを見ながら『何がしたいのか』を確認するようにしています」。

「遊びに入ってこなかったときに、『何しにどこに行こうとしているのか』を確かめに職員がついていき、1日の終わりのケース検討で『今日はあれがしたかったみたいだよ』と共有して次の遊びに反映させています」。

質問紙調査の自由記述から



他者への興味と共感：「他者に興味を示さなかった子が友達の顔の特徴を捉えて描くようになったり、友達に「おもちゃを貸して」と言われた際に貸してあげられたりするようになった。」

協力する姿：「砂場での山作りなど、友達と共通の目的のために協力する姿が見られるようになった。」

安心基地の形成：「登園拒否をしていた子が時間をかけて安心できる場所を作り、見通しを持つための視覚支援（スケジュール管理）によって、混乱せずに過ごせるようになった。」

自己刺激行動の減少：「自分の頬を叩くなどの自傷行為があった子が、環境調整と好きな遊びを広げる支援によって、その行為が減っていった。」

自信と意欲：「自信がなくアイコンタクトもなかった子が、スモールステップでの成功を丁寧に褒められることで自信をつけ、自ら訴えたり意欲的に関わったりするようになった。」

「言葉が出る子でない子に限らず、『どうしたの?』と問いかけてアクションを待つ時間を大切にしています」。

「『私ってこうなんだ、僕ってこうなんだ』というこどもの声をどう大人が見ていくかを大事にしています」。

「重度の肢体不自由児であっても、お友達と手が触れ合うぐらいの距離で設定遊びをすることで、他者の存在に気づき、共有できる時間を設けています」。

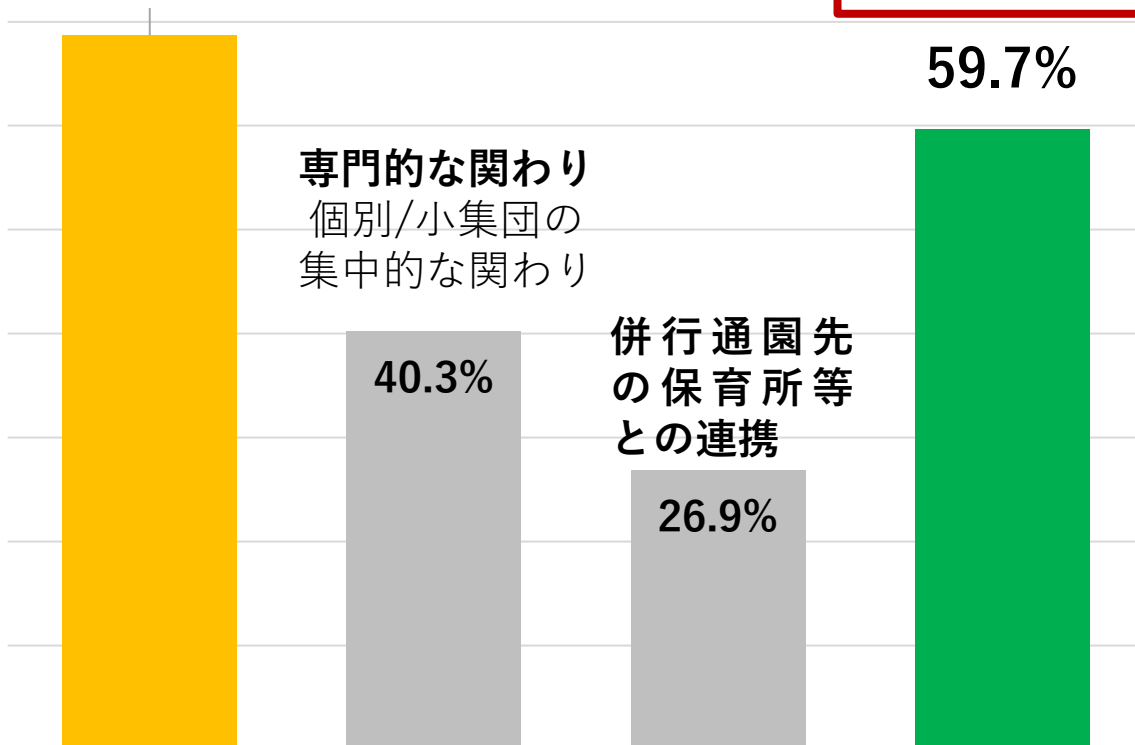
「こどもはやっぱり同じ年齢の子たちと一緒にいるっていうことで、やっぱりすごくいろいろなことを吸収していく...そこはやっぱり大きいなっていう。」

こどもの変化に影響を及ぼしたものの

こどもの変化では「日常生活の関わり」が大きいですが、次いで「家族支援・保護者支援」が大きく関わっていると実感しているところが多い。

日常生活の場の関わり

生活・遊び
保育的な関わり
68.7%



質問紙調査の自由記述から

「ネット情報通りに育児が進まず、自分を嫌いだと思うと悩んでいた母が、療育の遊びや生活の中で母への意識が育ち、親子のコミュニケーションが増え、こどもへの関わりに喜びを感じ、積極的な関与が増えた」

「子育てにおいて、保護者の安心感が子どもの安心感にもつながることは大きいと思います」

「（外出が困難だったケースで）ツールについては、家庭でも同じものを使って買い物に行けるように保護者と思案し合って作成。……結果、保護者と一緒に行く近所への買い物が上手にできるようになった」

ヒアリングから

保護者の回復がこどもの安定につながる

「3ヶ月ぐらいやっぱり通ってくると、やっぱりそのこどもの変化が見えてくると、やっぱりお母さんたちくるのが楽しくて、どんどんこどもが変わっていく」

保護者間のコミュニケーションの増加

「お互い自分の関わり方を見直して、お子さんに適切に関わっていこうっていうことで、かなりお子さんが変わって、非常に適切な行動が増えてきている」

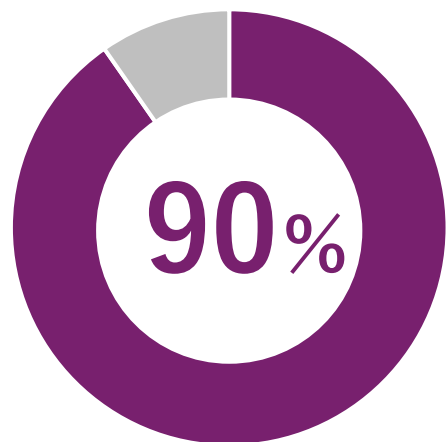
母親の「心の持ち方」の変容

「なかなかこども変わらないですと言いながら、余裕を持ってそれを見れるようになった…母親自身の心の持ち方が変わったのは、なんか実感ができたりする」

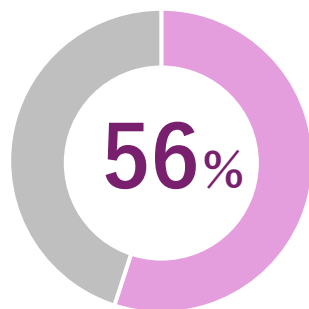
保護者の声や思いを日々の支援に活かすための工夫

保護者の声の活かし方

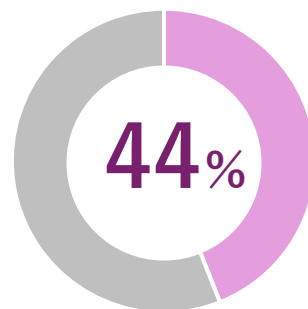
保護者の希望や意向、家庭での困りごとをふまえ、支援に活かしている



こどものことを一緒に考える機会を日常的に設けている

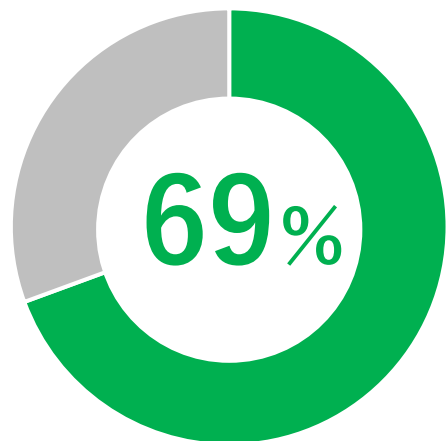


同じ悩みを持つ保護者同士がつながる機会を設けている

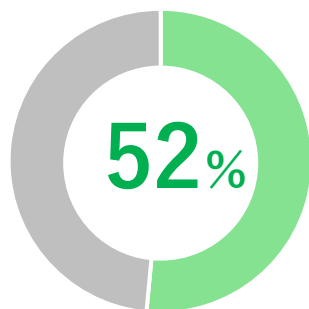


保護者の変化

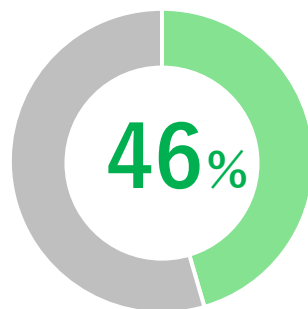
こどもの成長や変化を職員と一緒に喜べる機会が増えた



保護者の安心感が高まり、こどもとの関わりが安定した



同じ悩みをもつ保護者同士がつながり、支え合うようになった



質問紙調査の自由記述から



「共働き世帯が増えたことが1つ大きな理由ですが、日曜日、祝日に営業日を設定し、ペアレントトレーニングなど**保護者が来れる日を設けて、保護者と児童が通所できる機会**を作っています」

「**保護者視点をとらえるためのロールプレイング**を職員研修で実施している」

「これをすれば十分という取組はないので、あらゆる機会・方法を使って今の保護者の気持ちを拾うようにしている」

「**精神的に不安定な保護者も少なくありません**。保護者の表情や話し方、反応の様子から状態を見極め、その日の状況に合わせて伝え方や話す内容を工夫することが大切だと考えています」



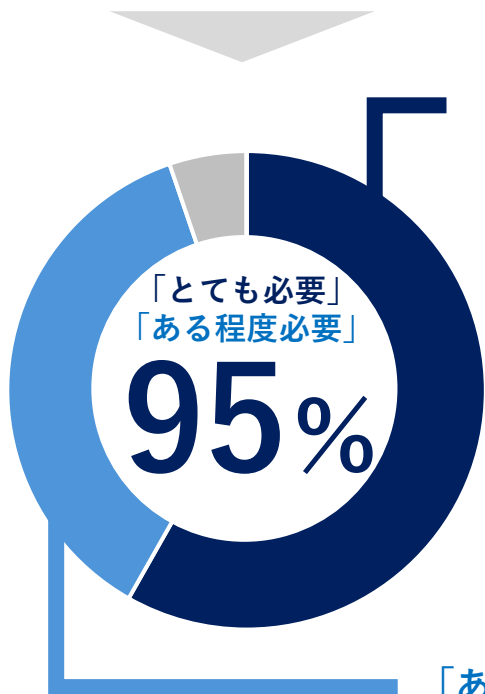
ヒアリングから

当初は「現実逃避したい」と悩んでいた母親が、**親子通園を通じて「自分は子育てを頑張っている」という自信**を持てるようになった。

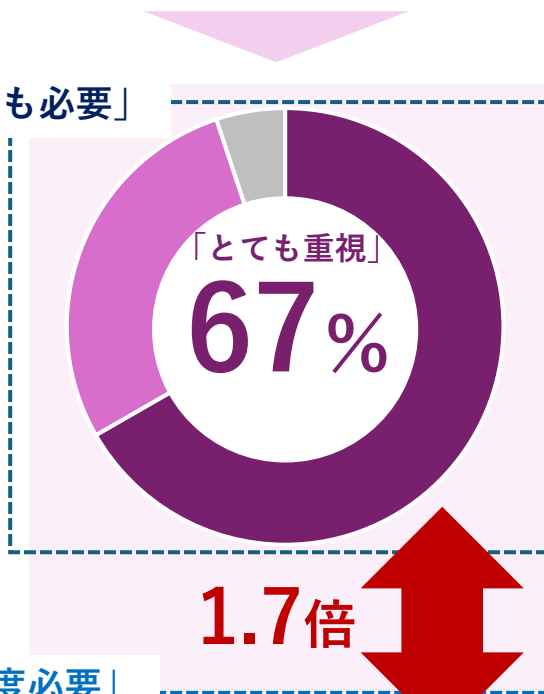
入園当初、不安の裏返しから職員に対して「あれがダメ、これがダメ」と激しい怒りをぶつけていたが、**先輩保護者と話したり、職員も丁寧に話を聞くなかで、職員への気遣いができるようになったり、さらには他のお母さんたちの悩みを聞き、保護者会**の話を回せるようになるまでになった。

共に過ごすことの必要性の認識と地域との関わり、インクルージョンの取組の違い

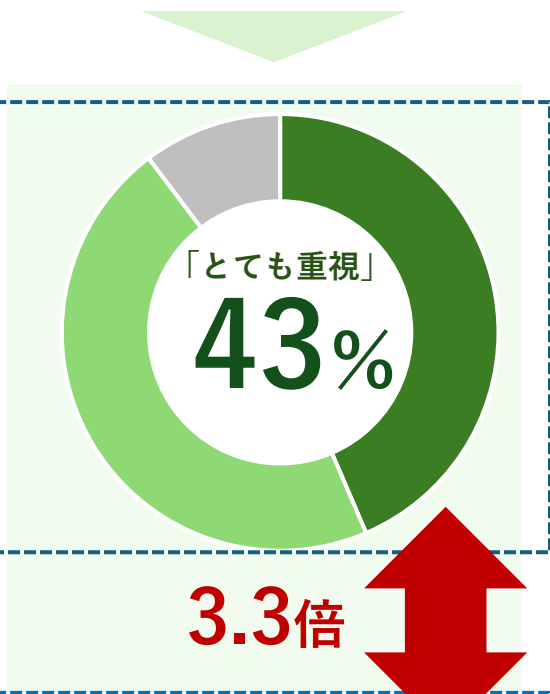
障害のあるこどもと、ないこどもが共に過ごすことは必要だと思いますか。



地域との関わりを通じて、こどもが育っていくことを支えること



社会のインクルージョンが実現できるように取り組みを行うこと



質問紙調査の自由記述から



「小さいうちに、障害のある子に、障害のないこどもが、ふれあうことは、**将来的な差別や偏見をなくすことにつながる**と思います」
「お互いの強みを知りその強みを生かして協力できる、そういう社会が出来上がれば、**誰にでも優しいまちづくりになるのではないかと**考えています」

ヒアリングから



「専門的な相談を聞いて地域で過ごせるよう支えてあげれば、**シームレスに繋がって**いける」。
「子育てをどう地域で、こどもに関わるいろんな人が一緒に地域の子育ての力を底上げしていけるかということがインクルージョン・インクルーシブってということとも繋がる。」
「発達支援っていう観点だけでなく、子育て支援であり、こども支援であり、家族支援であるということを啓発していきたい」。

1.7倍

3.3倍

ソーシャルワーク・外部とのコーディネータ・インクルージョン推進の役割を持つ職員の存在

ソーシャルワーク的な役割

家族の背景をふまえ、地域の人や資源とつなげている職員

日々の支援や関わりの中での「こどもの声（言葉・表情・行動など）」の受けとめ方、支援への活かし方

家庭・保育所等・事業所の目標を一致させ、活動に反映している

いる 41.9%

17.6%

いない

2.4倍

外部とのコーディネーター的な役割

行政や保育所等・医療など他機関と連携し、情報共有や会議調整を担っている職員

こどもの変化で影響が大きかったもの

こどもの併行通園先への保育所等との連携

いる 37.7%

19.8%

いない

1.9倍

インクルージョン推進の役割

インクルーシブな環境づくりを推進している職員

こどもの参加を広げるための環境整備・調整（ユニバーサルデザイン／合理的配慮など）

コミュニケーション支援
ピクト・ジェスチャ・拡大代替手段の準備

いる 81.0%

45.1%

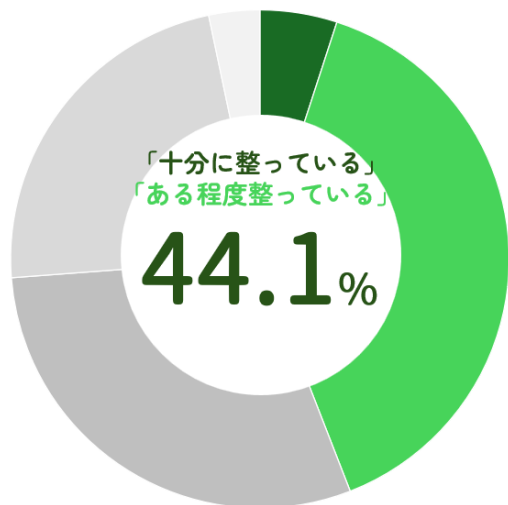
いない

1.8倍

保育所等の課題感

2024年度の研究から

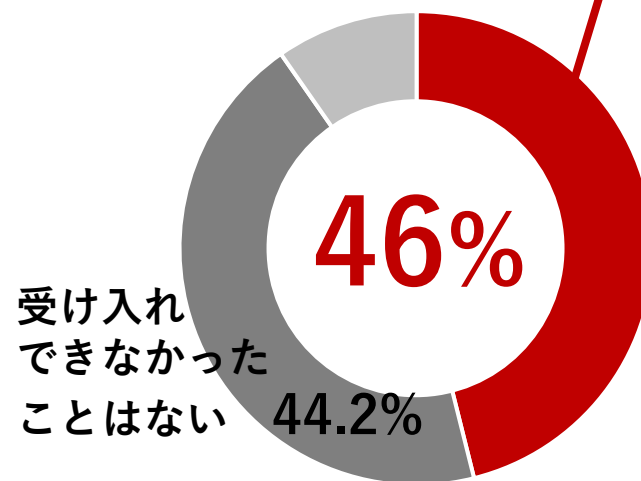
障害のある子どもや特別な配慮が必要な子どもの保育体制はどの程度整っていますか？



十分に整っている：5.0% ある程度整っている：39.1% どちらでもない：29.7%
あまり整っていない：22.9% まったく整っていない：3.3%

課題がないわけではない。保育所やこども園の保育体制が十分に整っていません
かったり、「受け入れできなかったことがある」と回答する園も多い。

「受け入れできなかったことがある」



職員数が足りないなど体制不足により
受け入れできなかった

33.5%

障害種別や障害の重さにより
受け入れできなかった

21.3%

障害に合わせた設備不足により
受け入れできなかった

10.5%

保育現場・子どもとの直接的関係：ミクロの視点

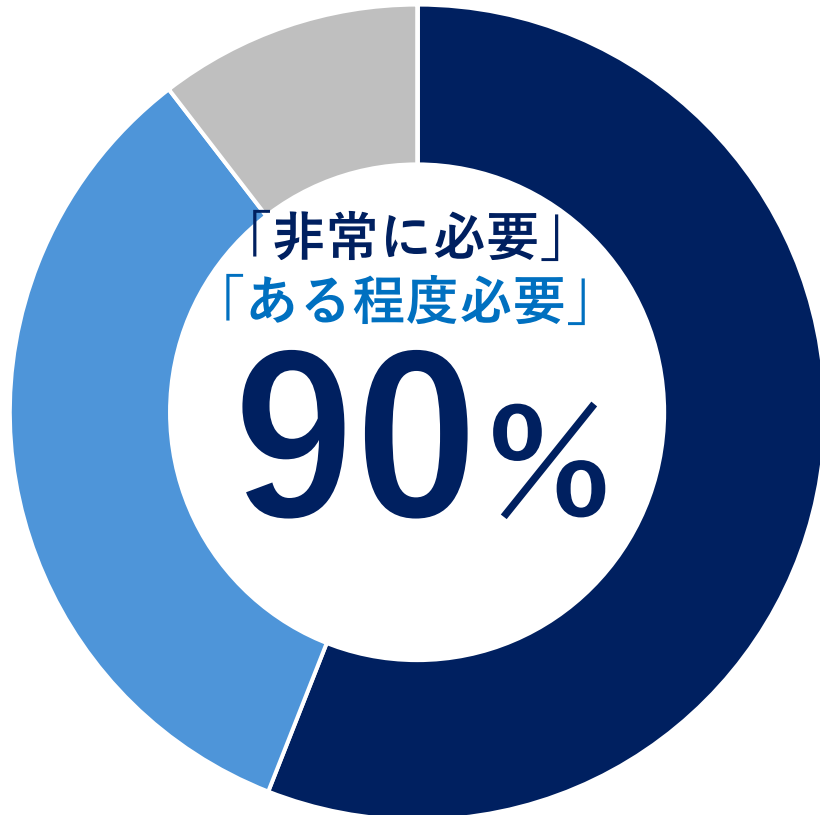
- ・ 子ども一人ひとりのニーズを把握しきれない
- ・ 保育者の特性に応じた専門性の学びの機会の不足：子ども一人一人にあわせた関わりには学びの機会が必要。
- ・ 子ども同士の関係づくりの難しさ：多様な背景のこどもの遊びと学びをつくる難しさがある。
- ・ 保育者の精神的サポート：精神的負担に関わる保育者のメンタルサポートやチーム支援が必要。
- ・ 子ども観・保育観の変革が追いついていない：多様性を育む恒常的な取り組みが不足している。

保育施設・組織運営・地域との連携：メゾの視点

- ・ 施設環境：クールダウンスペースやバリアフリー設備などの整備が進まず、受け入れが制限される場合がある。
- ・ 就学先との連携不足
- ・ 家族支援と地域コミュニティのつながりの薄さ：保護者間の情報共有やピアサポートの場が不十分で、孤立感に繋がっている。
- ・ 児童発達支援との連携の難しさ：児童発達支援との方針の違いや情報共有不足が、支援の一貫性やこどもの生活リズムに影響を及ぼしている。
- ・ 保育所等訪問支援や巡回相談の頻度と質の不足

こどもの育ちを支えるために、 児童発達支援への通所はどの程度必要だと考えますか。

児童発達支援センター 児童発達支援事業所

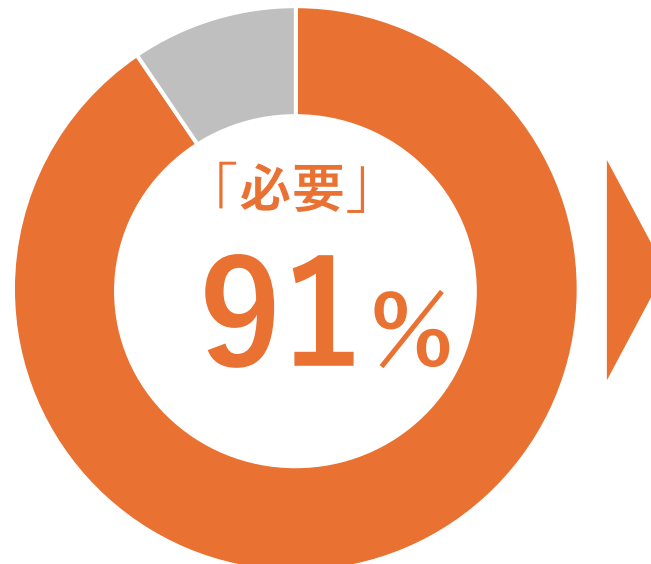


児童発達支援も保育所等も通所の必要性を感じている。

【保育所等】

- ・園での対応の難しさなどから、通所の必要性を感じている。

保育所・こども園



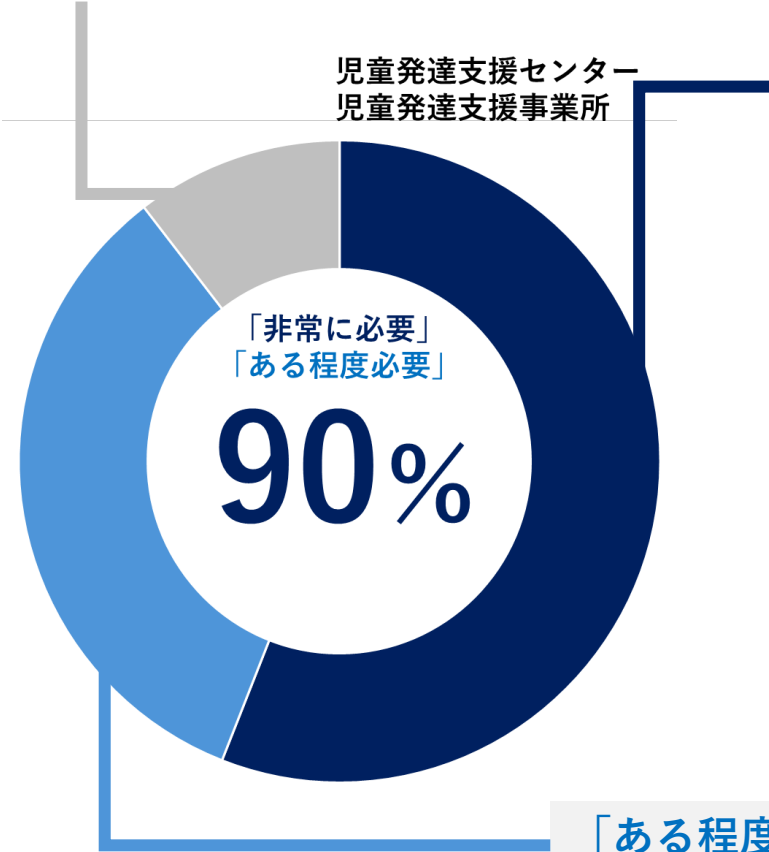
繋げようとした理由（抜粋）

こどもの自信や自己肯定感を高めるため	51.2%
園での集団生活の困りを軽減させるため	47.7%
家庭などでの保護者の困りを軽減させるため	45.2%
園での対応には限界があるため	35.9%
こどもの二次的な問題への発展を防ぐため	32.9%

児童発達支援の 通所の必要性の認識

「どちらともいえない」

1. 「まず保育所等のインクルーシブ環境の中で専門家が個別支援を行うことが重要」
 - ・ 通所型は小集団／個別で強みを伸ばす支援として位置づける。
2. 家庭・園・関係機関の連携の中で切れ目なく支えることが必要



「非常に必要」

1. 大集団では困難が顕在化・見過ごされるため“小集団での安心・成功体験”が必要
 - ・ 大集団で「困る」「助けを求められない」「理解できないまま同調して見過ごされる」こどもがいる。
 - ・ 小集団・個別で「気持ちを伝える」「挑戦する」「自信をつける」ことが、保育所等での生活を可能にする。
2. 個別の発達ニーズに応じた“専門的支援（多職種）”が必要
 - ・ 「保育所＝集団生活中心／児発＝個別ニーズに応じた支援」という役割分担を意識。
3. 児童発達支援でのアセスメントが園や家庭での生活に有効・必要
4. 家族支援（保護者の安心・孤立の解消）を中核機能
5. “早期療育”・早期介入により「成長の幅が増える」等が重要。

「ある程度必要」

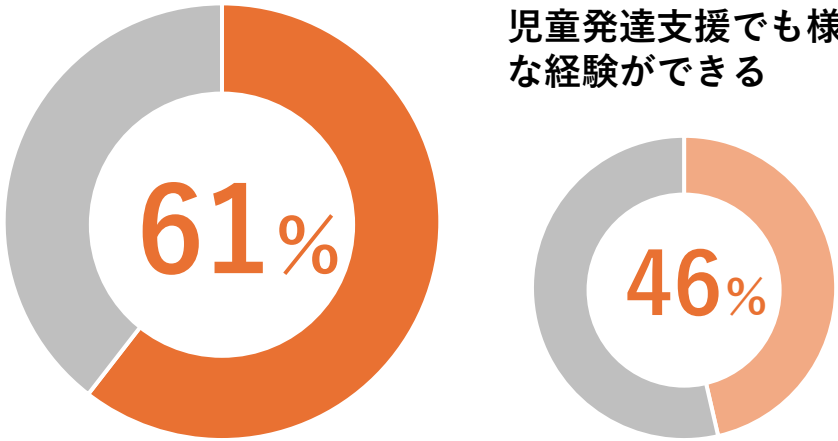
1. 「通所が絶対条件ではない」「段階的に減らすべき」
2. 「むしろアウトリーチが重要」「保育側に支援ノウハウが定着すればインクルージョンで
きる児童は増える」
3. “連携は必須”：「連携して支える体系の中での一要素だから」
4. インクルージョン（同年代集団での経験）への意識：“地域の同年代との関わり”が必要。

専門的な関わりや家族支援の必要性から通所の必要性を感じている。

こどもが児童発達支援を受けることで良かったと思うこと
2024年度の研究から

こどもの実態把握、
効果的な支援につながる

児童発達支援でも様々な
経験ができる



集団的な学びと個別支援による効果を重視

- 「集団で育つスキルと個別で育つスキルがあると思う。また多くの人に関わってもらうことで保護者のこども理解や保護者自身のつながりも広がる」

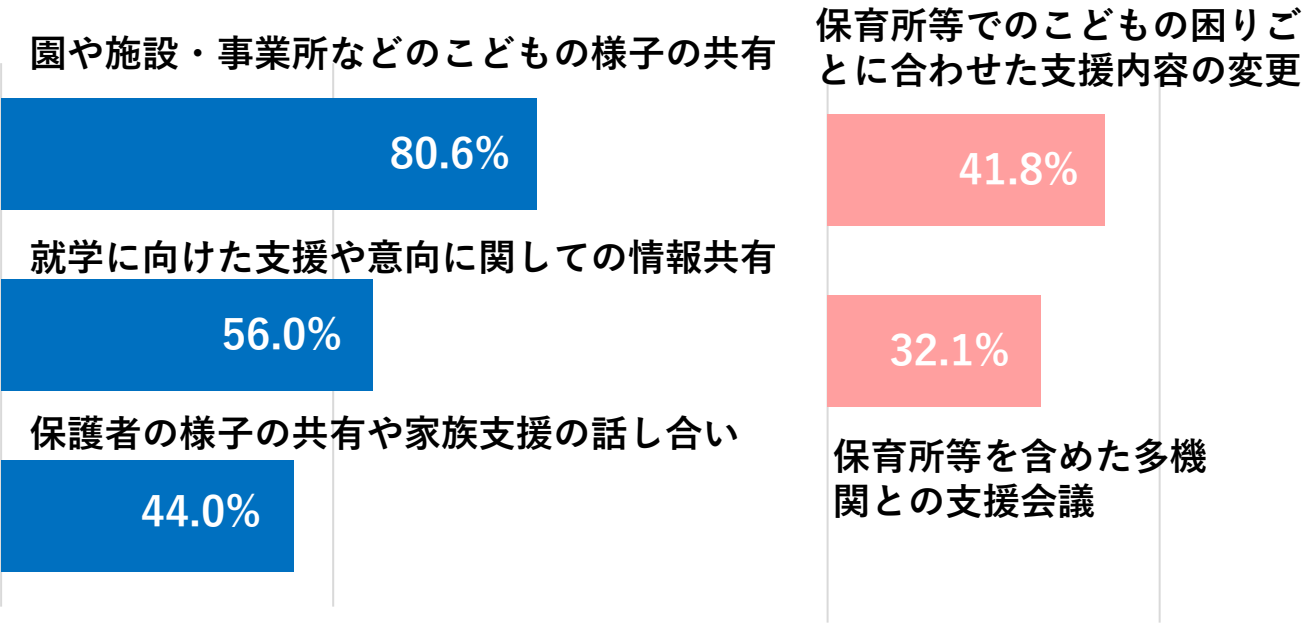
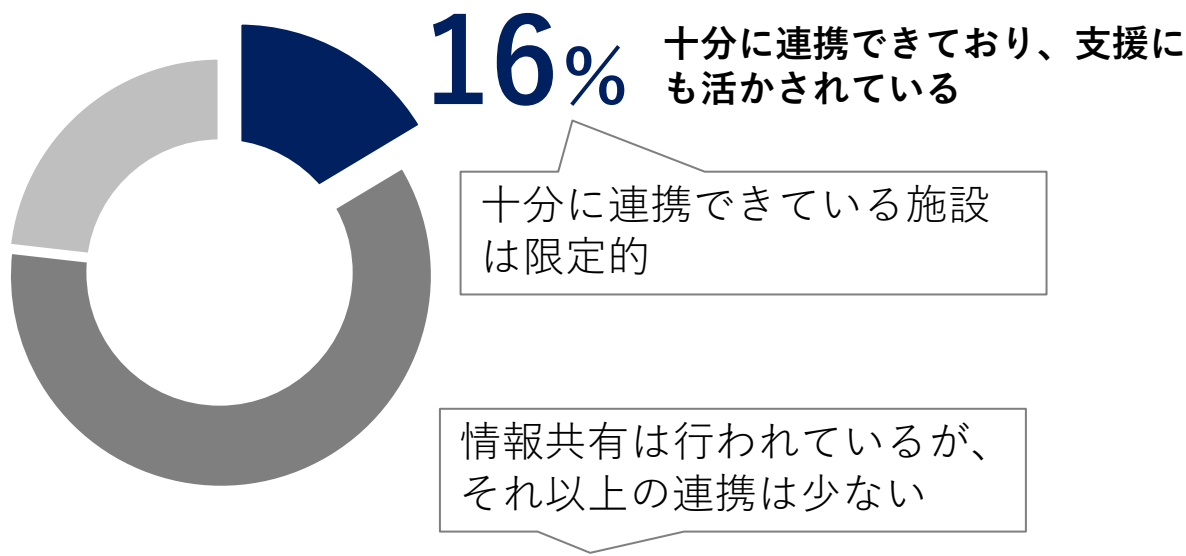
サポート体制の確保やこどもの安心感を重視

- 「少人数で落ち着いた時間の確保のため」
- 「個別や小集団での丁寧な関わりが必要」
- 「将来的に通常級や学童に通うことが難しいとなったときに、受け皿を把握しておいてもらうため」

保育時間や送迎の利便性も通所を後押しする理由

- 「送り迎えがあり、長期休業中、土日通えるので保護者の負担が減る」

保育所等との連携の状況





保育所・幼稚園・こども園
児童発達支援センター・事業所

- ・ **日常の中での自然な理解**：医療的ケア児が園庭に出た際、周囲のこどもたちが「なぜ管がついているの？」と尋ね、「お口がちっちゃいから管で食べるんだよ」という説明を自然に受け入れ、帽子を拾ってあげるなどの関わりが日常的に生まれています。
- ・ **集団の中での居場所の獲得**：「最初は『あの子と遊ばないで』と言っていた子たちが、**お互いの気持ちを代弁するやり取りを重ねる**うちに、だんだん直接声をかけるようになり、最後はお相撲ごっこの仲間に誘うようになりました」。

併設・一体運営により「特別な交流」から「日常の混ざり合い」へ

- ・ 児童発達支援センターと保育の物理的・心理的障壁を取り払い、「特別な活動としての交流」ではなく「**日常としての混ざり合い**」へ移行する実践。
- ・ 基盤として、職員同士の関係性を通じた“一体感”が重視。
- ・ 保育士も近くに専門職がいることで、日々の保育を相談しやすい環境がある。

- ・ **関係性の逆転**：「シール貼りで飛行機を作ることが得意な子が、その**得意なことを認められるうちに、お友達から『仲間に入れて』**と言われるようになり、一方的だった関係が双方向のものに変わりました」。



心理士と作業療法士を配置し、インクルーシブな環境づくりに取り組んでる。

- 心理士と作業療法士は月に数回来園し、こどもたちの観察、アセスメント、保護者相談などを行っている。専門職と保育士が協働してこどもたちの発達を支援。
- 心理士とOTは、単なる契約関係ではなく、長年の信頼関係に基づくパートナー。
- 職員が気づいた「こどもの姿」や「工夫」に対し、「それでいいんだよ」「すごいね」と共感と賞賛を行いながら理論的な裏付けを加えている。それが、職員にとって大きな自信となっている。
- 専門職の視点が入ってくるのは、保育者の実感があって、基にアセスメントの視点や、振り返りの視点が浸透。

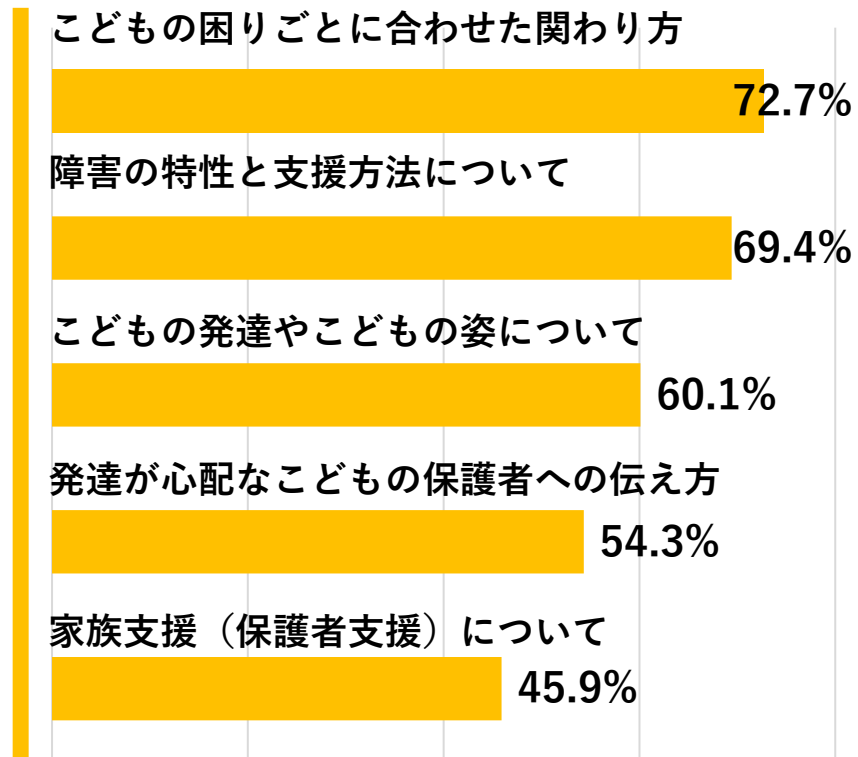


「預かった以上は責任を持って見る」という理念のもと、歴史的に障害のある子もない子も受け入れる環境と作ってきた。子どもが自ら育つ力を信じ、育ちやすい環境を整えることを大切にしている。その中で、様々な専門家と協働し、園内のインクルーシブな環境、文化が育まれており、現在は作業療法士を常勤職として配置している。

- 2ヶ月に1回、個別支援計画を作成している児のケース会議を実施し、日々の姿をタイムリーに共有している。
- 作業療法士の尺度（体の動かし方等）と保育士の尺度（気持ちや関係性）を合体させ、保育の質を向上させている。
- 子供の育ちを信じる姿勢が、障害受容に苦しむ保護者の価値観を大きく変えている。

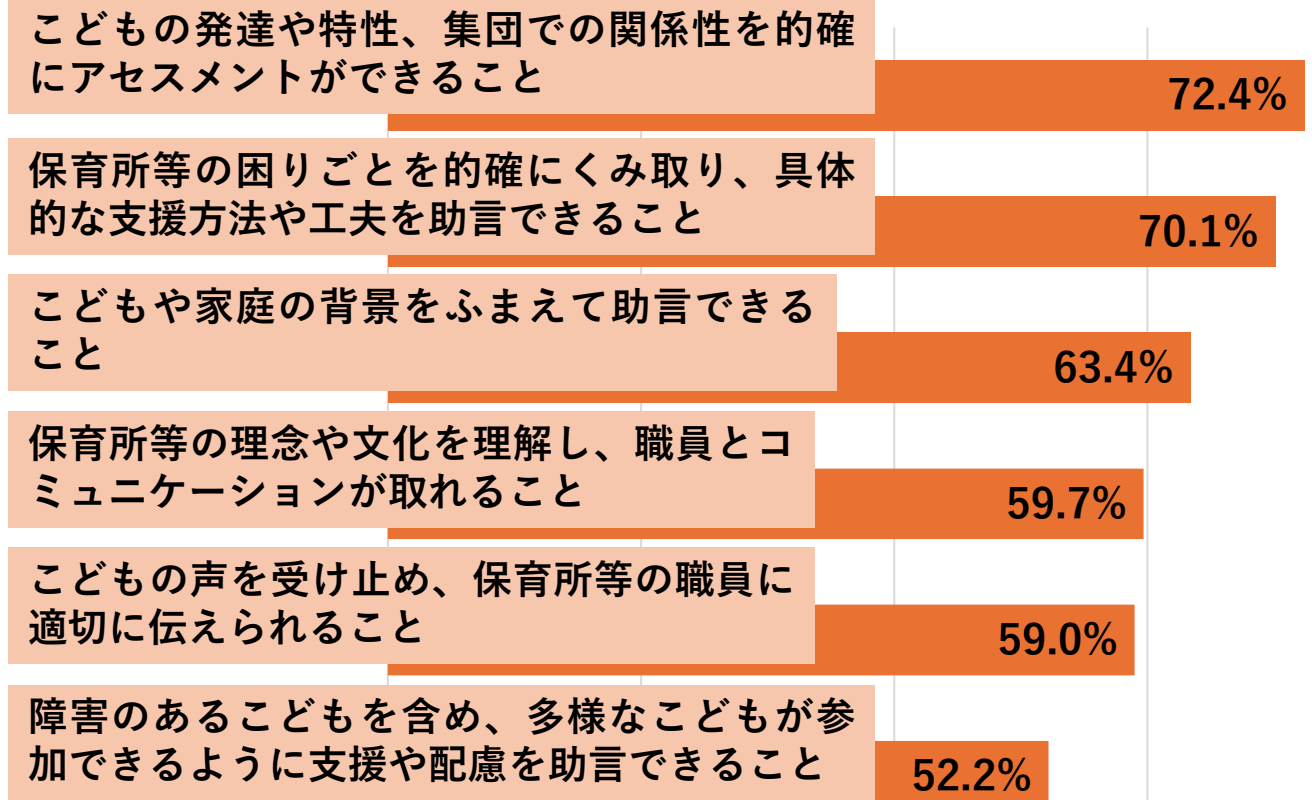
後方支援（アウトリーチ）

保育所などが 外部機関に相談したいこと



児童発達支援センター・児童発達支援事業所

後方支援（アウトリーチ）を行う際に、職員にどのような技術や考えがあることが望ましいですか？



ヒアリングから

地域の“ハブ（拠点）”化とアウトリーチ（後方支援）への転換

センターを拠点に専門職が地域の園へ出向き、現場保育士をエンパワーメントする「後方支援」モデルが、明確な方向性として語られている。

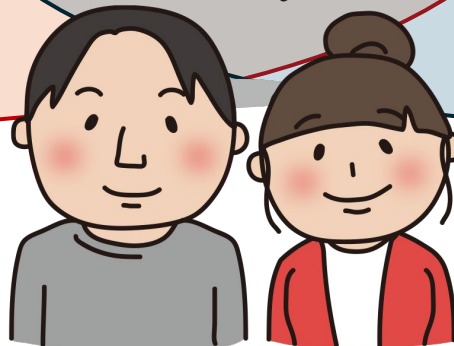
「困ってから行く」ではなく「予防的・伴走的」に関わる姿勢が、支援の設計思想として示されている。



保育所・幼稚園・こども園



児童発達支援センター・事業所



こどもを「こども」としてとらえる視点を保育所等も児童発達支援も持っている。

互いに「こどもとその家族」を**中心にした、地域で安心して暮らせる居場所づくり**の可能性が見えてくる。

残りの期間でブラッシュアップさせながら
政策提言につなげていきたい。

「障害があるとかないとかじゃなくて、こどもそれぞれがみんな違うから。その子その子に合わせた配慮が必要だと思う。そこを何か分ける必要はないのかな」

「今までセンターの機能って通ってもらうところ。でも、出ていって、ここを拠点に、ハブみたいなもんですね」

ヒアリングから

「障害があるから特別な子育て、ではなく、より丁寧な子育て。その喜びや楽しみの視点抜きには、親御さんが介護者になってしまう」

「保育園がダメな子はセンターに行く、という道筋ではないやり方が、本当はあるはず」

「こどもの理解を親とともにしていく。その子がいてよかったなと思える場になってほしい」

ご清聴ありがとうございました。

子どもの保育における
インクルージョン推進に向けた
調査研究の実施

助成：公益財団法人 日本財団

第8回FLECフォーラム＋ クロージングシンポジウム
2026年2月1日（日）

調査研究事務局次長・社会福祉法人麦の子会 尾西 洋平

Supported by
 日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION